
罪人は旅をする

byとろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

罪人は旅をする

【Nコード】

N3553X

【作者名】

byとろ

【あらすじ】

一つの世界を壊した少年は、違う世界で生きて償うことを誓う。最強の力を有し、少年は罪を償うことができるのか――

ブログ前編（前書き）

どうも、byとろと申します。

処女作なので至らぬところもあると思いますが、どうか温かく見守って下さい。

主人公最強なので嫌いな方にはオススメしませんのでご注意下さい

プロローグ前編

世界は多々、存在している。

平行世界、とか呼ばれている。

そこでは、自分の世界とは違う文明の進化の仕方や、きっと魔法も存在しているのだろう。

——もしかしたら、もっと面白いモノが存在している世界もあるかもしれない。

見えないけれど、神様だって居るのかもしれない。

救いのない、今となっては俺しか居ない、この世界にも神様はいるのだろうか。

居るのなら、見ているのなら、聞こえているのなら——

「・・・ハハ」

あまりにも現実味がない、どうしてこんなことを考えたのだろうか？

乾いた笑い声だけが荒野に響く。

数時間前までは、森だった場所だ。大きさにしてドーム球場8つ分程度だった気がする。

もう、関係はない。ただの荒野と化しているのだから。

自分がやったのだ。

この森を、否、この世界を、眼前に広がる荒野とおなじようにしたのは。

愛する人達を殺され、暴走してから、3ヶ月といったところか。
我ながら自分の力に恐怖を抱く、それでも手放そうとは思わない。
この力で生き、守り、貫いてきたのだ。

いまさら罪悪感がこみ上げてくる。

自分以外の形あるものを全て壊した。

自分以外の命あるもの全て根絶やしにした。

それでも――

それでも、それでも、それでも、それでも、それでも、
それでも、

それでも、それでも、それでも、それでも、それでも、
それでも、

生きると、死ぬなど、振り向くなと、媚びるなど、囁いてくる。

『罪を、死んで償うのは逃げだ。男なら、罪すら背負って生きて死ぬ。重いがな。それが償うってことじゃねえのか』

・・・ああ、おっさんか。

死ぬなど、ささやいてくるのは。

「・・・重過ぎる」

『諦めんなよ』

「・・・無理だ」

『どっしってっ』

「・・・俺には、何もないじゃないか」

『だったら、見つけりゃあいい』

「・・・どうやって」

『俺が手伝ってやる。・・・今回だけだぜ?』

「・・・!」

おっさんの口癖だった。

今回だけ、今回だけ、と何度でも助けしてくれるお人よし。

また、助けられた。

—— 神様

どんなに、滑稽でも

—— どうか

どんなに、無様でも

—— どうか聞いてくれ

どんなに、責められようとも

—— 俺を

願わずには、いられない

——生きて、償わさせてくれ

俺の視界は暗転した。

最後に見たのは、空から降りる一筋の光だった——

「・・・は!？」

気がつくと、真っ黒な空間にいた。

瞬間・・・

「っがあああああああああ!!!!!」

途轍もない激痛が体を襲った。

気が飛びそうになるのをグッとこらえる。

『よく、気絶しなかったもんじゃ』

どこからか、しわがれた老人の声がする。

「て、てんめえ、か・・・なにをしで、る?」

『・・・!? 喋れるのか!? 痛くはないのか、貴様!?!』

「イ、テエに決まってる、だろ、が」

『人が耐えられる痛みじゃないぞ！？どうなっている！？』

「こちと、らあ・・・っ生きなきゃいけねんだよおおおおお
おおー！」

全力で痛みを振り払い、力を解放し、見えない『それ』に一点に集中させ、穿つ。

荒神流殲滅式古戦武術・稲槌^{イツチ}

パキイイン、と甲高い音がしたかと思うと、とたんに痛みを感じなくなり、真っ白な空間に出た

『・・・・・・は？・・・』神の戒め（イージス）を力任せに解いただと！！？あ、ありえん！なんだその技はああああ！！？』

荒神流殲滅式古戦武術

全ての世界が作られる前にいたといわれる、荒ぶる神の武術
扱うには天才の上を行き、それ相応の代価が必要とされる武術
扱えれば、最強の名など欲しいがままにできる技

これを代価なしで習得したのは歴史上1人だけ——つまり俺だ
まあ、この技自体、表には公開されないスペシャルな技だ
『歴史上』なんていつでも公開されていないのだから意味はない

——もう、その世界もないんだっとな・・・

「・・・・っ、はあ、はあ・・・どう、だ」

『・・・・あらがみ・・・・？どこかで・・・・？』

「きいてんのか！てめえはだれだ！姿見せろ！」

『・・・ワシの名は、パーニセル』

ピシリ、と空間に亀裂が入る

そこから出てきたのは、初老の爺さんだった

『貴様のいた世界を管理していた『神』じゃよ』

ブログ前編（後書き）

どうだったでしょうか

ご感想おまちしております

ブログ後編（前書き）

頑張った。うん、だって途中からタイトル詐欺になりそうだったもの。頑張って回避したよ。
そんな感じの、後編です。

プロローグ後編

『貴様のいた世界を管理していた『神』じゃよ』

「な・・・なん・・・だと？」

神だど？本当にいたのか・・・いや、今はどうでもいい。

ならばさっき——神が『神の戒め（イージス）』といったもの—

——のは、神罰か。

仕方ない、なにせ世界を壊したのだから、罪はあつてしかるべきだ。

「そうか・・・神か・・・」

『又ウ・・・驚かんのか？』

「自分が死んだことは、半信半疑だったがさっきのとあんたが神と
いうことで確信に変わったよ」

「死んだことを受け入れられるなんて変わったやつじゃ」

「俺は、普通じゃないんでな」

『たしかに、普通のヤツが世界、それも最上位クラスの世界を壊せ
るわけがない』

「・・・」

『さて・・・分かっているのだろう？』

「・・・ああ」

『なら話は早い、神罰を下さねばならん・・・抵抗するか？無駄じやがな』

「・・・抵抗なんてしない」

それが償いとなるのなら、うけいれよう。

『一万年、『神の戒め（イージス）』を受けてもらっ』

一万年？

「・・・えよ」

『・・・ぬ？』

「短え、つつたんだよ！・・・俺が何億人殺したと思ってやがる！」

『そんなモンじゃ・・・それに、『神の戒め（イージス）』一万年が短いとは・・・その辺の神ですら耐えられぬというのに』

「だから、どうしたあ！そんなんで償えつつうのか！てめえはあ！」

『・・・おぬし、本当に世界を壊したのか？・・・とてもそうは思えんのだが？』

「聞いてんのはこつちだ！こたえろよ、神いい！」

『ふむ・・・とりあえずうるさいのお・・・黙らせるか』

神がそうつぶやいた瞬間、神を中心に衝撃波が生み出される。
憤慨して我を忘れていた彼はあっけなく吹き飛び粉々になる――
予定だったのだが

『な、なに・・・！？』

彼は立っていた、少し飛ばされながらも、傷一つ負うことなく、彼は立っていた。

「いったろ？俺は普通じゃあない・・・」

『神にはむかうか・・・調子に乗るな』

「人の話を聞けよ！」

『人ごときが、神に意見をするな！』

「ちっ・・・力ずくでも聞かせてやるぜ」

『ぬあああああ！！』

「らあああああ！！」

馬鹿げた力同士がぶつかろうとした時――

ピリリイイイイ

『・・・！？』

「・・・！？」

「そこまでですよ」

声がしたほうを向くと、そこには

金髪碧眼の端正な顔立ち

ゆったりとした白の服

背中から生えた大きな翼

イメージそのままな天使がいた

『む・・・ラファエルか』

「御無沙汰でございます、主」

ラファエルと呼ばれた天使は、どうやら、神の僕のようにだ

『邪魔をするな・・・貴様も分かっているだろう？・・・こやつが
世界を壊した男じゃぞ？』

「そのことに関してでございます」

『なに・・・？』

「あなた様もよろしいですかな？」

「ん？・・・あ、ああ」

いきなり話を振られ、すこし焦ったが、どうやら、自分に関する」とらしい

「それでは・・・まず、あなたは世界を壊してはいません」

「・・・んな!？」

「あなたは利用されたのでございます」

『どういつことじゃ?』

「ええ・・・第五天界使隊長・シュハーゼが堕ちたのでございます」

『なに!? シュハーゼが!？』

「・・・だれ？」

「天界——つまり我々が住んでいる全ての世界に干渉できる唯一の世界でございます。天界使とはその守護を任されているもの達のことでございます。シュハーゼはその第五部隊の隊長でした」

『ラファエルは第一部隊隊長じゃ』

「へえ・・・偉いんだな」

「いえいえ」

先ほどまでの剣幕はどこえやら。いつのまにか話し込んでいる、神と天使と少年の図が出来上がっていた。

「話がそれましたね。・・・この、シュハーゼが世界を壊したのでございます」

「まってくれ。俺は世界を壊したのを憶えているぞ？」

「ええ、あなたはシュハーゼに記憶を変えられたのでございます」

「記憶を・・・？」

「はい・・・我々は、仕事上他の世界に跳ぶのですが、その際、見られてはいけないのですよ。混乱を引き起こしかねないですから。ですが、見つかってしまった場合に備え、記憶改変の術をもっているのです」

「・・・それは、神も間違えるのか？」

『わしは、2百年泊3百年の旅行に出ててのう・・・』

「なげーな・・・旅行・・・」

『そんで帰ってきたら、この有様じゃ』

「我々の仕事は罪人を裁くこと。ですが、罪人を見つけるのは中々骨が折れまして・・・そこで、罪悪感をたどっていくのですよ」

『ああ、それでわしは間違えたのか』

「そのようですね・・・」

「・・・??？」

「ああ、すいません。つまり、

『神が帰って来たら世界が壊れていた。そんな事をした大罪人は裁かなくっちゃ』さーてと・・・あ、人間がいるぞっ! アイツの罪悪感はずいいなあ・・・お、やっぱりこいつが世界を壊したのかあ、神、怒っちゃた! 裁いちゃおーとっ!』
・・・ということでございます」

「・・・・・・・・・・(ダラダラ)」

『・・・・・・・・・・(ダラダラ)』

汗が止まらない・・・ああ、俺の、俺の天使のイメージが・・・

隣を見たら、神も汗をダラダラ流してやがる。アア、今だけは同情するぜ・・・

「・・・・・・・・?どうしました?」

「いえ・・・なんでもないです」

『んんっ、・・・つまり、わしの勘違いじゃったというわけだ・・・許せ・・・』

「・・・・・・・・いや、いいんだ」

「本当に、間に合ってよかったですよ。世界を壊したシュハーゼとその仲間を止めてくれた、いわば英雄ですからね。なにかした日には、首が飛びますよ、神が」

『・・・・・・・・え?(ダラダラ)』

「・・・え？ま・・・さ、か？」

『い、いやいや、な、な、なにもしてないよ？（ダラダラ）』

そっぴや、『神の戒め（イージス）』とかいうのをくらったな・・・
てか、神の汗の量がやべえ・・・

「な、なにしてんですかー！？あなたはー！？」

『い、いやあ、ちよつとキレちゃってねえ？』

「『きれちゃってねえ？』じゃないですよ！・・・なにしたんですか？」

『・・・ジス』

「・・・え？」

『・・・神の戒め（イージス）』です』

「・・・」

『・・・』

沈黙が空間を支配していた。

1分程度たち、口を開いたのは俺だった。沈黙には耐えられない。

「い、いやあ・・・俺氣にしてないし？」

「そういう問題ではないんです・・・」

『むっ！そうじゃ、お詫びになんでも願いを叶えてやるっ』

「か、神そんな・・・ほんとうか？」君ものらな——」

ラファエルが口をつむぐ。きっと、俺の真剣な顔を見たからだろう。

『おお、かなえてやるぞ？』

「なら、俺は——償いたい」

『・・・？世界を壊したのはおまえじゃないんだぞい？何を償う？』

「俺は、それでも殺している・・・ずっと、生きるために」

「それは仕方のないことでしょう？」

「それでも、だよ・・・だから、生きて償いたい」

『・・・・・・』

神は、俺の顔をじつと見ている。俺は目をそらすことなく前を向いている。

『いい目じゃ・・・よい、わかった、君を別の世界へ送ろう・・・いいんだな、それで？』

「ああ、ありがとう」

『元はといえばこちらの過失じゃ、気にするな』

「それでも、ありがとう」

『ふん・・・さあ、とばすぞ』

「もう、いくのか？」

『膳は急げじゃ・・・必要な物は送つとくから——ほれ!』

「あつ、ちょ、ま——」

ヒュンッ

瞬間、おれは光の中に吸い込まれた。

『不思議なヤツじゃった・・・』

「コッチはまだ終わってませんよ？」

『・・・え?』

「今日という今日は許しません!」

『捕まってたまるかい!』

「まちなさい！」

その後、天界で正座で説教をくらってる神の姿が見られたそうだ。

ブログ後編（後書き）

やっと、次から本編です。

てか、今回長くない？文の長さとかの指摘も欲しいですね。
感想待ってます。

最初の出会（前書き）

やっと、本編です。

急展開で自分もついてけねえ・・・ダイジョブか？

最初の出会い

俺は光に包まれていた。

そして一瞬の浮遊感の後――

「・・・へ？」

俺は森の中にいた。周りを見渡してみると、少しはなれたところに茶色のポーチが落ちていた。

「なんだこれ？よっ、と」

拾い上げて中を確認してみると、そこには、ガン〇ムのマニュアルのような物があつた。

「えーと、なにになに？『この世界について』って、マジマニュアルかよ」

くー一時間後く

とりあえず本の内容をまとめると

この世界の名は「ゼン・ブローグ」ということ。もといた世界より下位に位置しているらしい。

ここでは、所謂「魔法」が存在しているということ。

魔力は世界中に漂っている、それが獣と合わさって暴走してできる「魔物」がいること。

大陸が3つあり、それぞれの大陸に種族が3種族いること。

一つ、「人間」「デ・ダリア大陸」

一つ、「魔族」「ランテール大陸」

一つ、「天族」「シャーナイン大陸」

表立つては、争いはないが、所詮「表」のこと。「裏」では偏見が棄てられていない奴もいること。

ちなみに俺が今いるところは人間——つまりデ・ダリア大陸だ。

大体こんなところだろうか。

まあ、細かいところは追々知っていけばいいだろう。

そう、俺は決め、とりあえず明日からいろんなところに行こうと思
い、野宿の準備を始めた。

俺と残りの4人は焦っていた。

1週間ほど前に、俺たちの村が賊に襲われた。生き残りは俺等5人
だけ。

取り残されて、死のうとも思ったができなかった。

必死に俺たちを逃がしてくれた、村長に申し訳が立たなかったから。
俺たちは生きなきゃならなかった。

1週間、なにも食ってない。もう、限界だ。

正常ではない思考で、生きなきゃいけない、生きなきゃいけない、
とただただ思っばかり。

そんな俺たちの前にうまそうな猪を狩っている少年がいた。

黒い髪に、黒い目

身長175センチぐらいの端正な顔立ちのひょろっとした少年だった。

気がつけば俺等は動いていた。

少年を殺そうと、そして、食料を奪おうと――

野宿の準備が終わったので、食料を取りに行くことにした。

森を少し進むと、丁度、猪――ここで猪かはわからないが――
がいたので、捕獲しようと猪に向かって地面を蹴る。

ヒュッ

まだ気づいていない猪の頭部へ正拳突きをくりだす。

猪の頭が（以下略）

キレイに頭のなくなった猪を見つめ、自分の体が軽いことに気づく。きっとこの世界が下位に位置しているからだろう、と解釈して猪を持っいていこうとして――

ガサッ

茂から屈強な男4人がナイフ片手に襲いかかったきた。

それをすばやく回避して首裏に手刀を当てる。

気絶した4人を尻目に、隠れている1人へすばやく近づき同じように気絶させる。

〽1時間後〽

パチパチと、薪で火を燃やす音が夕暮れの森に響く。

あたりには、猪なべのいい香りが漂っている。

「・・・っう」

「やっとときがついたか」

「……え？」

屈強な男の1人が目を覚まし、何かを言う前に猪鍋のはいった容器を渡す。

「食えよ」

男は考える前に体が動いたようだ、差し出されたそれをむさぼるようにたいらげていく。

もともと、猪一頭なんて1人では食べきれないので丁度いい。

「……つつ」

他の奴等も目を覚ましたようだ。同じように、猪鍋を差し出すと、こちらにもむさぼるようにたいらげていく。

「落ち着いたか？」

あらかた鍋も終わったところできく。

「……は！あああつ、す、すまない！」

最初に目を覚ました、男が土下座してくる。それを見た他の4人もハッとし頭を下げてくる。

「いいから」

「許されることではな」「いいって」・・・は？」

「だからいいって」

「し、しかし・・・」

「腹、すいてたんだろ？なら、しかたねえよ・・・人間、腹すいてるときに正常な考えなんて出来ねえ」

「そ、それでも・・・これでは・・・」

「ならさ・・・」

「な、なんだ！？何でもいつてくれ！できることならなんでもする！」

「何があつたか教えてよ」

「・・・わかった」

フウ、と落ち着けると静かに語りだした。終始、喋っている男以外誰も口を開かなかった。

男は、話し終わると頬に涙を伝わせた。他の4人も同様に。

「そんなことが・・・」

「すまないな、話し込んじゃって・・・」

「いや、いい・・・話してくれてありがとう・・・いくあてはあるのか？」

「ないな・・・でも、生きなきゃなんねえ」

「・・・!!」

『生きなきゃなんねえ』

その言葉を聴いた瞬間、理解する。

同じだと、なら俺にできることは――

「なあ、傭兵やんねえか？あんたら」

「傭兵・・・？」

「ああ、困ってる人を助けるんだ」

「ム、無理だよ、俺等は弱いし・・・」

「俺が鍛えてやる。大丈夫だ。それに戦いだけじゃない、人とのつながりを、今度は守れるようにならなきゃいけないだろ？」

「な、なあ・・・あんたどうして、俺たちにそこまで？」

「・・・同じだから、さ」

「・・・そうか」

男はそれで理解したようだ。そして5人で話し合っている。

「結論はでたか？」

「ああ、俺たちは傭兵をやる。もう2度と大切な物を失わないために・・・！」

「そうか・・・俺の名は玖恩くおん 大和やまと」

「くおん？・・・かわった名だな」

「ああ、大和が名前な？」

「ん？そうなのか？・・・おれの名はカイン・ボアル」

「俺は、イーシュ・ローグ」

「おれっちは、クジャ・レメット」

「・・・おれは、トール・バーテリン」

「ぼ、ぼくはコウツール・シュターテッドです」

「オツケー。傭兵団の名前だが、シャリオがいいと思う」

「「「「「・・・！」」」」」」

五人が息を飲み、そしてうなづく。シャリオとはこの五人の村の名だ。

「なら、ここにシャリオ傭兵団、結成だ！」

最初の出会い（後書き）

次は、物語の中で一カ月後です。

あ、でもキャラ説明必要かな？どうしよう？
感想待ってます。

大きな壁（前書き）

どもです。

一応傭兵編は中盤の為の伏線なので（だといいなあ）ちゃちゃっと終わらしてしまいます。書くのが面倒だったわけではないです。時々、展開が飛ぶので気をつけて。

大きな壁

「もう、一ヶ月か・・・」

何となしにもれた独り言。しかし、その言葉には色々な思いがこめられていた。

あの、トートの森でシャリオ傭兵団が結成してから一ヶ月がたっていた。

ちなみに、この世界には『ギルド』が存在している。

魔物の討伐や、物資収集等の仕事の仲介所だ。

仕事量や仕事の質でランク分けされており、下から、E、D、C、B、A、Sと分けられている。

ランクCでベテランの域。ランクSは世界に12人しかいないらしい。

俺たちはギルドで正式にシャリオ傭兵団として登録し、仕事をして一ヶ月でランクCの仲間入りを果たした。

ちなみに、ギルドはトートの森から1キロいったところのカヤという街にあった。

俺たちもここを拠点に活動している。

最初の方こそ、主に金銭面で大変だったが、俺の（地獄のような）特訓により着実に力をつけ軌道に乗った今ではほとんど困ることはない。

それに皆ともだいぶ打ち解けてきた。

「はいもんですね・・・」

「カインか・・・」

どうやら聞こえていたらしい。

「イーシュたちは？」

「今さっき仕事に出て行きましたよ」

「そうか」

「ええ、頭には感謝してます。まさか、一ヶ月でランクCまでいくとは思ってませんでしたよ」

「俺的には、おまえ等の成長スピードに驚いてるよ」

「まだまだ、頭には程遠いですけどね・・・それに、それをいうなら頭がまだ16っていうことに驚きましたよ？」

「そうか？・・・しかし、一番驚いたのはツールが酒を飲んだ時かな」

「ああ、あれはたしかに」

「だよなあ、まさか無口なあいつが酒を飲んだとたんおしゃべりになるんだもんな」

ついつい、世間話に花を咲かせてしまった。

「・・・で、なんのようだ？」

「ええ、それがですね頭」

「今までスルーしてたが頭は決定か？」

「え？ああ、もちろんですよ？」

なに言ってたんだ、こいつ？みたいな顔で見られてしまった。

「それですね頭、俺たちにどうやら名指しの依頼がきているようなんです」

「良かったじゃないか。そうそう名指しなんてないんだろ？」

「ええ・・・問題は内容なんです」

「どういうことだ？」

カインは側にあつた机に依頼書を置く。

「これは・・・」

そこにあつたのは『悪竜・ドゥードウラ』討伐の依頼書だった。

悪竜・ドゥードウラ

この街から3日程いったところにあるラテオ火山に棲む、竜型の魔物だ。

火山から移動することはないものの、これまで幾度もギルドの派遣した者を返り討ちにしてきた、強者だ。

討伐ランクはBでも上級。つまりほぼAランクだ。

間違っても、最近ランクCになった傭兵団に来る仕事ではない。

なにか、裏があるのか・・・

「どうしますか・・・？」

「・・・頃合いか」

「え？・・・」

「イーシュたちは、どのくらいで帰る？」

「・・・明日にはかえって来るとは思いますが・・・まさか・・・？」

「ああ、この依頼、受けよう」

翌日、イーシュたちが帰ってきたのを確認し、話を持ち出した。

「ドウドウラー！・・・いやいや、冗談キツいっすよ、頭・・・」

「・・・冗談、ではなさそうだ」

「あ、あわわわわ」

「・・・・・・・・」

イーシュは黙っていたが、他の三人は汗をにじませていた。

「急だと思う、すまない」

「なにか、考えが？」

イーシュが質問を投げかけてくる。

「俺は以前、ずっとここにはいられない、といっただろう？」

「ええ・・・まさか、いまが・・・？」

「ああ、頃合いだと思う・・・すまない」

「謝らないで下さい・・・元はあそこで死んでいた命を拾っていただいた身、感謝しています」

「ああ、おれっちたちもだ」

「」「」「感謝します」「」「」

「ふ・・・ああ、こちらこそ」

「へへっ、んじゃあ出発は明日っすか？頭？」

「ああ、今日のうちに準備しとけ」

「オッケーですよ。んじゃ、食いモンかってきます」

「ああ、ありったけな。なにしろ、一週間以上もでるんだ」

「そ、そうですね・・・それじゃボク装備の整備をします」

「ああ、たのむ」

そういつて、でていくクジャとコウツール。

「さて、おまえ等も明日に備えてよく疲れをとっておけ」

「ええ、いわれなくても」

「・・・頭こそ」

「それでは、頭、失礼いたします」

「おう」

三人が出て行き、部屋には大和ひとりだけになった。

窓を開け、つきを望む。

紅く光る大きな月だ。

「・・・なあ、義之」

今は亡き、親友に話しかける。

「俺は、きっと答えをみつけたしてみせるよ・・・だから」

見守っていてくれ、戦友よ――

大きな壁（後書き）

（設定）

主人公

玖恩 くおん やまと 大和

荒神流殲滅式古戦武術・現継承者

名前は思いつきですが、苗字は意味があります。

断罪神・パーニセル

名前の由来は「パニッシュ（罰する）」から
後は特にないわ

次は、戦闘です。

砕壁（前書き）

文才がほすい・・・
一応、学園モノに移行する予定です
きつと、たぶん・・・

碎壁

カタンカタン、と馬車が揺れている音で目を覚ました。

「お、頭。目が覚めましたか？」

「ん・・・ふわぁ、あ、あ・・・今、どの辺だ？」

あくびをして、目をこすりながらたずねる。

「コーラル溪谷を越えたところです」

「そうか・・・明日にはつくかな」

「ええ・・・」

「・・・不安か？」

「そりゃあ、そうですね。なにせあの悪竜ドウドウラですから。しかも、頭抜きですよ？不安になるなっつてのは無理な話です」

そう、悪竜ドウドウラは、俺を抜いた5人で討伐するよう言った。

随分無茶を言ったものだ、自分でも思う。

しかし、この5人を残して旅に出るとなると、どうしても不安になつてしまう。

俺も、そしてこいつ等も。

だからこそ俺抜きで倒すようだったのだ。

「大丈夫さ。自分を、そして仲間を信じろ」

「頭・・・」

カタンカタン、と揺られながら、もう一度俺は闇に意識を落とした。

『ふむ・・・』

初老の男性――神、パーニセルは静かに鼻を鳴らした。

ここは、天界。唯一、他の世界に干渉できる世界と、彼、玖恩大和という少年にはいったが、少し違う。

ここは世界ではない。

全ての世界の外。

別次元、とも違う。特別な空間。

ここが、どこなのかはパーニセルにもわかってはいない。

創世神、破壊神。原初の二神しか知らぬことだろう。

「どうされました？」

天使、ラファエルが聞いてくる。

神、とはいっても世界を見守ったりはしない。『断罪神』それがパ
ーニセルの役柄だ。

神は多様にいて、それぞれ役目を務めている。

『断罪神』たる彼にはあまり仕事がない。

死者の魂は然るべきところで判定される。

彼の仕事は、抑えられない罪人だけだ。

故に、彼は暇なのだ。

『あの少年のことじゃ』

「ああ、彼ですか。どうやら順調そうですね？」

『そっちについては心配してないんじゃないかのお』

「では・・・？」

『もう少しで、思い出せそうじゃないか』

「・・・」

『ムッ、なんじゃその『ぼけたかコイツ？』と言いたげな目は？』

「さすが神。一言一句間違えていません」

『正直に言っな！そういうのには気をつかえ、と言っておるっ！』

天界は今日も平和だった。

さて、あれから一日。俺たちは目的地、つまりラテオ火山に到着した。

きりたった岩肌、それらの隙間から覗かせるマグマが赤く輝いていた。

熱波がジリジリと肌を焦がしている。

「・・・・・・・・」

後ろを見ると、5人がいきを飲んで火山を見上げている。

辺りにはなんともいえぬ緊張と、殺気が漂っている。

「よし、いくぞ」

俺はそう促し、火山に入ってしまった。

俺——カインは一応、このシャリオ傭兵団のリーダーを務めている。

頭はいるが、戦闘で頭は出てきたことがないし、傭兵団を結成して一週間ほどたった時に、『ずっとここにいられない』と聞いていたからしかたない。

頭はそのとき、頭のしてきたことと、今何をしているかを話してくれた。

頭は、独りだ。

だからこの仕事を達成して、少しでも頭に近づきたい。

それがせめてもの恩返しだった。

ラテオ火山に入ってから、頭は周辺の魔獣を片付けに行った。

頭ならドゥードウラも一人で相手できるのではないか？

そんな事を思いながら、気を引き締める。

俺がリーダーなんだ。

「よし！いくぞっ」

そういつて、俺等は山を登り始めた。

悪竜は人を襲いはしない。もちろん、こちらが手を出したり、縄張りに入らなければの話だ。

しかし、悪竜自ら人里に降り、力を振るうことはない。

ならばなぜ、悪竜といわれているのか？

それはその30メートルを越す黒い身体と、暴れだした時の特性のせいだ。

ドゥードウは暴れだすと自分の縄張りの命、全てを根絶やしにするまでは終わらない。

その凶悪性こそが、悪竜の悪竜たる所以だ。

それを俺たちは実感していた。

頂上付近の比較的平らなところに奴はいた。

すでに俺たちが侵入してきたのはわかっていたのだろう。俺たちを見た瞬間、襲い掛かってきた。

それを何とか避けて、クジャが得意の火炎魔法を放つ。

ポオオ、と音を立てながら鱗を焼く。しかし、その身体に傷一つつくことはなかった。

「ギギヤオオオオオオオオオオオオ！」

ドゥードウラの咆哮だけで身体が吹っ飛びそうになる。グッとこらえ咆哮が終わると同時に駆け出す。

一気に近づいて、おもいつきり大剣を振り下ろした。

ガキッ、と鈍い音がしてはじき返されるが、ほんの少し鱗に傷がついた。

「よし、いける！」

勝てる！

そう確信した。そのときは。

甘かった。そうそう簡単に倒せる相手じゃなかった。

今は岩陰に隠れて、攻撃のチャンスをうかがっている。

トールが雷を、クジャが火炎を放った。

バリリイイイ！

ボアアアアア！

「ギギヤアアアア」

ドゥードウラの口から黒い靄が吐き出される。黒い靄が雷を包み込

み相殺する。

炎があたり、鱗を燃やす。

その瞬間、俺とイーシュは岩陰から飛び出し剣を振るう。

コウツールは、補助系魔法で俺たちの一撃を強化する。

ガッ!!

「ギギヤアアア」

鱗を数枚弾き飛ばしたが、ドゥードウラの大木のような腕に薙ぎ払われる。

「うがつ」

「うおお」

50メートルほど吹っ飛び、すぐに岩陰に隠れる。

こちらの攻撃はとある。

しかし、あちらの一発が重過ぎるのだ。

もう5人とも、後10回攻撃できればいいほうだろう。

だからこそ、伝える。

「みんなあ!!」

「くっ、どうしたカイン!?」

「アレをやるぞおお!」

「アレをつ!?・・・いや、分かった!」

「リョーカイ!」

「・・・分かった」

「わ、分かりました!」

5人がドゥードウラの攻撃を避けながら集まる。

そして全員が俺の剣に全魔力をかける。

俺の剣『ブルー・リーディング』は、かけた魔力を倍にして打ち出す、魔剣だ。

俺たち5人の残った全魔力を注ぎ込み、撃ち放つ。

赤色の光弾がドゥードウラを穿つ。

ドゴオオオオオオオン!!

「グギヤアアアアアアアアアアアアアアアア」

巨体がゆっくり倒れこむ。

「・・・ツハアハア、や、やったか?」

いきも絶え絶えに、土煙を上げ倒れたドゥードウラを見る。

砕壁（後書き）

次の更新はちょっと遅れます。

もう、ネタが尽き「ドゴ」ぐはあっ！

あ、あとがきのネタがナイダケデスヨ？ホントウデスヨ？

新たな門出（前書き）

更新遅れるんじゃない？

そんな事は無い。句切りが悪いのでちやちやと書いてしまいました

俺は悪くねえ、俺は悪くねえ

そんな感じです。

新たな門出

俺は、周りの魔獣をあらかじめ殺した後、実はあいつ等を観察していた。

「頑張ってるな・・・」

少々危ないが、何とかなる、そう思っていた。

事実、カインが『ブルー・リーディング』を使うのは最良だったし、アレで殺せたはずなのだ。

本来ならば。

光弾がドゥードウラに当たる瞬間、空間がゆがみ、光弾の威力が落ちたのだ。

案の定、ドゥードウラは殺されず、あいつ等は動けない。

体は勝手に動いていた。

縮地、と呼ばれている移動法だ。

走り初めから最高速になるという面白い技だ。

荒神流ではない、ただ確立した技だが使い勝手があるので良くつかう。

一瞬でドゥードウラの頭部へ移動する。

ドゥードウラの頭は吹っ飛び、体はゆっくりと後ろに倒れた。

俺は死ぬと思っていた。だが、現実はず違った。頭の無いドゥードウラはすでに絶命している。

ドゥードウラの横から人が出てきた。

それを見た瞬間、俺は悔しくて悔しくて泣いてしまった。

何だ、この様は・・・

結局、最後は頭に助けてもらった。

俺は自分の不甲斐無さを恥じていた。

頭はそんな俺等を見たあと、予想外にの言葉をかけた。

「よくやった」

「「「「「え・・・・・・？」「「「「「

「最後の一撃・・・本来ならアレはやつを倒せるだけの威力だった」

「し、しかし・・・あいつは」

「当たる瞬間な・・・空間がゆがんで光弾の威力が落ちたんだ」

「え・・・？」

「合格だよ、よくやった」

「しかし・・・っ」

「いいんだ、安心したよ・・・アレだけの実力があればどうとでもなる」

「う、うっうう・・・か、頭ぁ・・・」

「ありがとう・・・こんな俺についてきてくれて・・・」

「がじらぁ・・・」

「さぁ、帰ろう。うまい飯をたらふく食うぞ！」

「「「「「はいつ、頭」「」「」」」」

こうして、俺たちのドゥードゥラ討伐は幕を閉じた。

帰った後、ドウドウラの討伐以来の完了を報告して（リンクはBになった）、俺は荷造りをして旅に出られるように備えた。

そして1週間たち――

「もう、いくんですか？頭」

「ああ、これ以上グダグダしてたらずっとここにいちまいそうだ」

「・・・そう、ですか」

「ああ・・・おまえ達もこれから大変だろうが頑張ってくれ」

「ええ、何かあつたら連絡を下さい。すぐにいきます」

「ふっ・・・ああ、そうだな。こっちも色々と落ち着いたら手紙を書こう」

「まっていますよ・・・」

「おう。さて、それじゃあ、いくわ」

「はい、ご武運を」

「はっは、じゃあな」

そういつて俺は歩き出した。まだまだやらなくちゃいけないことが沢山あるんだ。

「いつちゃったな・・・頭」

「ああ、そうだな」

「でも・・・」

「大丈夫だろ？」

「か、頭ですもんね！」

「・・・ああ」

「よし、いくか」

そういつて俺たちも歩き出す。守らなくちゃいけない物が沢山あるからな。

そこは闇の中。

その中に老人はいた。

「そろそろか・・・」

若い執事は答える。

「ええ・・・理事長」

「これから少しでてる」

「分かっております」

「ふおっふおっふおっ・・・」

「それでは良い『スカウト』を」

新たな門出（後書き）

新しい小説を息抜きに書きました。

そちらもよろしく願います（↑宣伝）

とりあえず傭兵編終わります。次から学園モノです（まじで）。
このブンだと更新遅れねえな・・・？

新生活・・・・・・・・の予感（前書き）

お久しぶりです！

設定を忘れてきている・・・

気にしないけどね？

新生活・・・・・・・・の予感

「すげえ・・・」

俺は目の前の光景に、ただ圧倒されていた。

飲食店から娯楽施設までそろっている大通り。

一際目立っているのは島の中心に建っている、おそらく島全土から
見ることができるであろう巨大な時計塔。

「ふおっふおっふお。・・・どうじゃ凄いじゃろ？」

「ああ・・・」

俺をここに連れてきてくれた爺さんの声にも上の空で応える俺。

それほどまでに眼前の景色に心 奪われていた。

目を奪われながら俺は、どうしてここにいるのかを思い出していた。

カヤの街を出てから、俺はとりあえず海を目指した。

海沿いなら情報の収集もしやすいと思ったからだ。

そういうわけで俺は今、街道を歩いている。

のだが――。

前方で馬車が襲われている。

「ありがちな展開だなあ・・・」

思わず、そう呟いてしまった。

賊は10数人程度。

助けないのは人としてどうかと思うので助けることにする。

縮地で一気に近づき2、3人吹き飛ばす。

いきなり仲間が吹っ飛び、啞然とする賊を容赦なく無力化していく。

あらかた片付いた後、馬車の方を確認しようと振り向くと――

ザシュッ！

剣が飛んで来た。

それを払い落とすと、馬車に乗っていたであろう爺さんが剣を振り下ろそうとしていた。

それを跳んでよける。

「ちょ、まて。俺はあんた等を――」

「又ウツ!!」

弁明も聞いてもらえず、高速で振るわれる剣を紙一重で、されど余裕をもっていなす。

相手の剣が緩んだ刹那――

俺は地面を思いっきり踏みつける。

ドゴォッ!、と地面が大きくせりあがり、爺さんがたじろいだ瞬間に背後に回りこみ首裏に手刀を当てる。

「・・・っ!!」

「落ち着いて。何もしないから」

そついうと爺さんは、突然笑い出した。

「ふおっふおっふおっふお。こりゃ、たまげたのお。まさかわしがこんなにも簡単にしてやられるとは。」

「な、なに・・・?」

「ふおっふお。いや、すまんのぉ、若いの」

「い、いや、いいんだが・・・。説明してくれ」

「うむ・・・実はな――」

「俺をスカウト？」

あらかた爺さんの説明を聞いたところによると、爺さんはどうやらある学園の理事長をしているらしい。

毎年、入学の時期になると各地を旅し、気に入った若者をスカウトしているらしい。

「うむ。わしはこれでもSランクじゃ。それを簡単にいなしたのじやから、実力は十分じゃて」

「そうか・・・って！ええ、爺さんSランクだったのかよ！？」

「ふおっふおっふお。『賢者』ヨハネス・ファールデルじゃ。よろしくのお」

「ああ・・・」

「で、どうじゃ？うちに来ないかのぉ？」

「ああ、分かった」

俺は二つ返事で返した。

「意外じゃな。親御さんとかの了承を得るとかは・・・？」

「いや、俺、両新しいし。それに、やることなく困ってたんだ」

「ふむ、そうかの。なら、いいんじゃない」

「おう、あ、俺はヤマト・クオン。よろしく・・・って、あ」

「どうした・・・？」

「俺、学費どうしょ？」

「ああ、心配するな。こちらがスカウトしたんじゃない。学費はこちらでもつからの」

「そうかい。なら、いこうぜ？」

「うむ、いくつかの」

そんな感じできたのだ。

「うむ、ようこそ。我がアルチエスタ魔法学園へ」

アルチエスタ魔法学園

三大陸の丁度真中あたりにある島全体が学園となっている。

世界最大級の魔法学園。

来る物拒まず。

どんな種族でも受け入れる教育方針で、多くのエリートを生み出してきたのだ。

「何か場違いな気がするな」

「ふおっふおっふお。まあ、じきに慣れていけばええ。こっちじゃ、寮に案内しよう」

「あいよー」

ヨハネスの後をついていく俺。

10分程で寮についた。

というかもう寮じゃなくてマンションだろ、これ・・・？

中は、1LDKという豪華使用。

「すごすぎだろ・・・」

「ふおっふおっふお。ほれ、学園内の見取り図じゃ。今日はもう休むとええ。明日は入学式じゃからのお」

「え・・・！明日！？いや、制服とかは・・・？」

「もう用意しといた。生活に必要な物は一応そろえてあるはずじゃ」
それでは、と言いついてヨハネスはどこかへ行ってしまった。

ボタン、とベッドに倒れこむ。

すると、すぐに睡魔が襲ってきた。

抵抗せずに落ちていく意識の中、明日、あいつ等に手紙を書こう、
と思った。

明日からの学園生活に思いを馳せながら、俺は眠りについた。

「お帰りなさいませ。理事長」

「ふおっふおっふおっふお」

「随分とご機嫌がよろしい様で・・・」

「ああ、楽しみじゃよ。なんせ、わしより強いだろうからの。それも圧倒的に」

「・・・えー!!」

「ああ・・・ああ、本当に楽しみじゃ・・・」

夜は更けていく。

静かに、けれど確かに、運命を狂わせながら。

新生活・・・・・・・・の予感（後書き）

やっと学園モノになりましたね。

感想待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3553x/>

罪人は旅をする

2011年10月23日20時03分発行